

Donne の *Anniversaries*

——更に上の横木に向けて

(聖職叙任への内的発展)⁽¹⁾——

伊 奈 幸 子

I

Behold the life of a Christian is a *Jacobs Ladder*, and till we come up to God, still there are more steps to be made, more way to be gone.
[*Sermons*, VI, p. 140]⁽²⁾

ダンはその生涯(1572-1631)に、諷刺詩やエレジーを書いたジャック・ダンから、聖ポール六寺院の敬虔な司祭長ダン博士へと大きな変化を遂げた。がその変化は、彼の伝記を書いたアイザック・ウォルトンを始め、同時代の多くのキリスト教信者達が想像したような、いわゆる「聖アウグスティヌスの回心——即ち、聖職叙任の際に、放蕩者から聖人へと一挙に目覚める回心」によるのではなく、徐々に信仰を深めていったものだとするのが、今世紀のダン研究界を代表する見解であると言えよう。たとえば、ダンの宗教詩と恋愛詩のすぐれた版を出したヘレン・ガードナーは、このダンの回心を、“a gradual one, brought about by the circumstances of his life and the maturing of his mind and temperament”⁽³⁾ と簡潔に表現している。言い換えれば、ダンの一生も、この論文のテキストとして冒頭に引用した彼自身の『説教』の一節中のキリスト者のそれのごとく、<ヤコブの梯子>であったのである。

もちろんダンの<梯子>は、生来敬虔な人々の場合のように、地上から天上に向けて直線的に向っているのではなく、幾分旋回していたかもしれない。がしかし、牧師になってからの後期のダンについては言うに及ばず、少々放縦で、

不遜な若者であった前期でも、1601年12月のアン・モアとの秘密結婚から、1615年1月の国教会入りまでの、世に埋れた、暗い、問題の多い中期でも、時には二、三段迂り落ちることがあったにしろ、彼は<梯子>を登り続けたいのである。

前期におけるダンは、ウォルトンの記述に従えば、早くも19才の頃から、神学の勉強を始めていたらしいし、その頃書かれた世俗的で、シニカルで、奇をてらう要素の多い作品中にも、ダンの宗教的真理への真摯な探求が、かなり若い頃から始まっていたことを告げる「諷刺詩第3番」“Satire III”のような作品もある。当時の彼にとって、宗教的真理が存在することは、決して疑いの対象とはならなかったのである。だが、言うまでもなく、若い頃のダンは、宗教人である前にまず世俗人であり、才気にあふれ、世俗的野心に燃えた社交好きな青年であった。

そしてその若い頃の、彼自身が“weighty Employment in the State”と呼んだ、俗界の要職獲得への野望は、病いに悩む妻子をかかえて、貧困にあえぐ、辛い、惨めな中期にも、弱まるどころか、益々強まっていったのである。ダンはこの野望達成のため、相当あくどい獵官運動を繰り返した。ところが、驚くべきことに、このような運動を行ないつつも、彼は一方では、しばしば宗教的瞑想にふけり⁽⁴⁾、数々のすぐれた宗教作品を執筆し⁽⁵⁾、信仰を次第に深めていっていたらしいのである。無論、神学の勉強も猛烈にやっていたらしい。この注目すべき二面性を、リージュマンは、

... a continuous deepening, a continuous progress in seriousness, and even in devotional religiousness, coexisting, ... with an unregenerate wit and worldliness and willingness to flatter the great.⁽⁶⁾

と巧みに説明している。それではこの中期にダンは一体どのようにして、<梯子>を登っていったのであろうか。

さて、この中期において、最大の作品と言われているのは、1611年及び1612年に書かれた『第一、第二周年追悼詩』*The First and the Second Anniversaries*

であるが、それに次ぐ意義をもつと言われるのは、“La Corona”に始まる瞑想的な宗教詩である。これらの詩の大部分は、ガードナーの入念な dating の研究によって、*Anniversaries* 以前に書かれていることが明らかにされた⁽⁷⁾。これらの宗教詩が、それぞれ、書かれた時点でのダンの内面的苦悩を物語っているのは言うまでもないことである。が、1608年秋という最も困窮していた頃に書かれた「連禱」“A Litany”は、theological であると言うより devotional であり、また非常に personal なので、他の詩より以上に、如実に当時の彼の内的葛藤や緊張を反映していると思われる。ダン自身によって、“meditation in verse”と呼ばれたこの詩には、混乱する人間社会や不安定な時代精神、低迷する自己等への憎悪や軽蔑の念があふれている。がそれらより以上に、それら故に絶望や死へと傾斜する気持を、必死で押し殺そうとするダンの良心の苦心の跡が著しく、たとえば、

From thinking us all soule, neglecting thus
Our mutuall duties, Lord deliver us.⁽⁸⁾

の2行には、“The Canonization”, “The Sunne Rising” や “The Good-morrow” 等の有名な恋愛詩中の恋人達の反社会的な態度と代って、自己を社会にしいて向わせようとする姿勢がみえ始めていると思われる。がしかし、happiness may exist in courts と願い、“this worlds sweet” と神への奉仕との両立をやや強調しすぎている点などから推察すると、当時の彼には、まだ俗界での立身の夢が捨てきれず、宗教界に入る、あるいは宗教人になるという明確な意識はなかったようである。すでに彼は、前年の6月に、後にダーラムの司祭となったトーマス・モートンから国教会入りを勧められていたのではあったが。つまり、当時の彼にとっての自己の理想像は、divine gentleman, holy layman であつたと言えよう。

ところが、同じ中期の作品でも、1614年の後半か、1615年の1月までに、つまり中期の最後に執筆されたと推定されている『神学論集』*Essays in Divinity* には、世俗の栄光をあきらめ、自分自身を説教者として考え始めているダンの

姿を容易に認めることができる。ダンは、ここで自己の全てを神への奉仕に捧げる決意をしており、社会共同体の一員となって働こうとする意欲も現わしていると思われる。

とすると、制作年代が、この二つの作品のそれには含まれている *Anniversaries* においては、ダンの姿勢になんらかの変化がみられるのではないだろうか。別な言い方をすれば、中期の代表作と言われる *Anniversaries* は、彼の内的発展史上どのような意味をもっているのであろうか。これが今から我々が追求していこうとする主題である。

II

Anniversaries は、若くして死んだ富豪の一人娘、エリザベス・ドルアリに捧げられた二編のエッセー——1611年に *epitaphium recens* として書かれた *The First Anniversary* と、1612年に *epitaphium anniversarium* として書かれた *The Second Anniversary*——から成り立っている。その少女が、ダンにとって未知だったことや、彼がエッセーを捧げたことによって、彼女の父親から物質的恩恵を蒙ったこと、更にそれらに盛られた少女への〈賞賛〉とその死への〈悲哀〉が、エッセーというジャンルの枠を越える程大げさなことなどから、さまざまな解釈が生まれ、中には、この作品へのダンの sincerity を疑い、失敗作、駄作とみなした批評家さえあった。が現在では、その意味するところについてはまだ紛糾しているものの、ダンの傑作の一つに、また彼の内的成長を物語る重要な作品の一つに数えられるようになっていく。何故なら、1948年ルイ・マーツによってなされた重大な発見「この作品でダンが行なっているのは、ロヨラ型の spiritual exercise, 心霊修業である」⁽⁹⁾ によって基本的性格が明らかにされたように、このエッセーは、ダン自身の心の中の serious な問題を meditation の形で内包しているからである。そしてこのマーツの提出した解釈は、1963年にこの作品の新しい版を出したフランク・マンリーによって、さらに押し進められ、つぎのように要約されるようになっていく。 *The First*

Anniversary と *The Second Anniversary* とは、それぞれ contrasting meditations (相互補助的瞑想)——contempt of the world (現世の軽蔑) と praise of Virtue (来世の至福の賛美)——の片方ずつを受けもち、マーツの指摘する “twofold aim of religious meditation”⁽¹⁰⁾ を満たして、二つで一つの全体を構成している twin poems であると⁽¹¹⁾。このことをはっきりと認識した上で、我々はいよいよ作品の検討に移りたい。

まず、『第一周年追悼詩』

The First Anniversarie: An Anatomy of the World. Wherein: by occasion of the untimely death of Mistris Elizabeth Drury, the frailty and the decay of this whole world is represented.⁽¹²⁾

「彼女の死によって、世界が病み衰えて死ぬ」というコンシートの上に組み立てられたこの詩の中で、ダンが苦悩する世界を解剖し、その “frailty” と “decay” を嘆き、人間の精神的墮落と、肉体の矮小化を語る。そして “new Philosophy” つまり新しい科学的合理主義の衝撃に、人々の中世的世界観が動揺する様相を描き、人間間の調和と、社会の秩序と、天地間の〈照応〉が失われたことを悲憤している。

And new Philosophy cal's all in doubt,
The Element of fire is quite put out; [F. A. 205-206]

'Tis all in pieces, all cohaerence gone;
All iust supply, and all Relation: [F. A. 213-214]

The art is lost, and correspondence too. [F. A. 396]

このように、すべての価値や基準が失われて混乱する世界の中で、人々が神を見失って墮落しつつある有様は、ダンの迫力ある描写によって、我々の胸に強くうったえかけるものとなっている。

だがしかし、忘れてはならないのは、この詩の main body が、〈現世の軽蔑〉をテーマとした meditation であったことであり、ダンにとって世界の解剖とは、世界（大宇宙）のマイクロズムとしての自己を解剖することでも

あったこと、さらに世界の腐敗と崩壊を嘆くことは、取りも直さず、自分や家族達のそれまでの不幸、病気や、失意、挫折、困窮を嘆くことであったことである。嘆きのシンホニイとでも呼べそうな、憂鬱なムードで貫かれたこの詩全体にひびきわたる切実な調子は、我々にいとたやすく、ダンが思うさま、自らの悲嘆にのめりこんでいることを気づかせる。が、これらのことより以上に、はっきりと想起されねばならないことは、この世界の解剖が、作品中にも、

I (since no man can make thee liue) will trie,
What we may gaine by thy Anatomy. [F. A. 59-60]

と暗示されているように、それによって何かを学びとろうとする意識的、意図的な努力であったという点であろう。

つぎに、『第二周年追悼詩』

The Second Anniversarie: the Progress of the Soule. Wherein: by occasion of the religious death of Mistris Elizabeth Drury, the incommodities of the soule in this life and her exaltation in the next, are contemplated.

この作品は、前にも述べたとおり、瞑想のもう一つのテーマ、＜来世の至福の賛美＞を受けもっている。が第一の詩とこの詩との決定的相違は、両者のフルタイトルにも的確を表わされているように、第一の詩が視点を地上において、分析的、科学的に書かれているのにひきかえ、この詩は、天上に視点を置いて、宗教的、瞑想的に書かれているということであろう。それ故、第一の詩では、絶望にうちひしがれ、嘆き悲しんでいたダンが、今や神への信仰に深く帰命し、明るい希望をもってこの世を再び生き始めようとしていることは、冒頭より一目瞭然である。“Forget this rotten world;...” “Forget this world,...” と、この詩において、ダンはず、第一の詩でこだわり続けたこの世界や死から脱けだそうとする。これが即ち、タイトルにみられる前進する魂の出発点といえよう。有名な「死後の魂の天国への旅」を描く部分は、後年の彼の宗教思想の一端を予告すると同時に、神をできるだけ身近かに感じたいという、ダンの熾烈な宗教的心情をうかがわせていると思われる。「徳ある人の魂は、死後直ち

に神の御前にはべるのだ」とダンはその状況を喜びつつ語っている。この部分に続けて、ダンは、“Looke vpward; . . .”, “Vp, Vp, my drowsie soule, . . .”と自己の魂を天国に向かわせ、さらに天国での自己の姿を想像させる。“in Heauen”, “at Heauen”と視点を一度に天上に移しかえてみると、第一の詩で語られ、嘆かれた不安が、つぎつぎと解消されるのである。「天と地との〈照応〉は失われてはいなかったのだ」「旧知識であるにしろ、新知識であるにしろ、地上的知識に依存しようとする“Pedantry”や、この世的権力獲得への欲望を捨て、humilityを学べ。何故なら、天国でのみ真の喜びは見出だされるのだから」と、ダンは自己の魂を説得し続ける。

In this low forme, poore soule what wilt thou doe?
When wilt thou shake off this Pedantry,
Of being taught by sense, and Fantasy? [S. A. 290-292]

No more affords this world, foundatione
To erect true ioye, were all the meanes in one. [S. A. 423-424]

全体的にみて、第一の詩で下方へ、後方へとのみ向けられていた詩人の目は、かわってこの詩では、魂の上昇につれて、上方へ、前方へと向けられ、

Returne not, my soule, from this extasee,
And meditation of what thou shalt bee,
To earthly thoughts, . . . [S. A. 321-323]

にも示されているように、ダンは〈来世の至福の賛美〉をテーマとした瞑想の中に、自己の未来像を描き出そうとしている。そしてこの未来像に関しては、我々はつぎに引用する結尾部をとくに重視しなければならないだろう。

Since his will is, that to posteritee,
Thou shouldest for life, and death, a patterne bee,
And that the world should notice of haue of this,
The purpose, and th' Authority is his;
Thou are the Proclamation; and I ame
The Trumpet, at whose voice the people came.
[S. A. 523-528. My Italics].

何故なら、一口に言ってしまうと、最後尾にあるラッパのイメージは、マンリーの指摘を待つまでもなく⁽¹³⁾、伝統的に予言者、牧師の意で用いられており、さらに第一の詩の結尾部に現われた、人々に神の歌を教えたモーゼ、牧師の原型としてのモーゼの発展した姿と考えられるからである。つまり、この部分でダンは、川崎寿彦先生もご指摘のように⁽¹⁴⁾、今後神の使いであった彼女の生と死を、警告のラッパに合わせて語ることによって、人々を天国への道に導く伝道者として、この世に生き続けるという決意を表現していると思われる。この点は、ダン自身が後年説教中、伝道者としての自己をラッパにたとえている個所があるという事実からもたしかめられよう⁽¹⁵⁾。

一旦このことに気付くと、この詩には、前述の上方へと向う動きの他に、もう一つ下方へ向う動き——先の動きより弱い、それだからといって、けっして無視できぬ——具体的には、この世で信仰に生きる生を肯定しようとする動きがあったことも、次第にわかってくるであろう。そして、我々はこの動きが、本文中につぎのように凝縮した形で表現されているのに気づく。

(For they 'are in Heauen on Earth, who Heauens workes do,).

[S. A. 154]

ダンにとって、天国は非常に身近なものになりつつあったのではないだろうか。なるほど、“essentiall ioye” は天国でのみ得られるものだが、“Ioye, essentiall” は、地上に住む我々にも味わうことが許されているのである⁽¹⁶⁾。

... shee to Heauen is gone,
Who made this world in some proportion
A heauen, and here, became vnto vs all,
Ioye, (as our ioyes admit) essentiall.

[S. A. 467-470]

以上の作品分析からも推測できるように、この *Anniversaries* は、あきらかに人生の岐路に立つダンの姿を示している。エリザベスの死は、ダンに現世と来世について、またそれらへの彼自身のかかわりあいについて、深く自省する

絶好の機会を与えたのだと言えよう。ダンは、*The First Anniversary* では、混乱し、途方にくれていた過去及び現在の自己をきびしく振り返り、*The Second Anniversary* では、悲嘆や絶望から脱けだし、新しい価値観の上に立つ世界の中に、将来自分のあるべき姿を、真剣に探索したと考えられる。

もう少し詳しく述べると、*Anniversaries* でのダンは、まず第一に、“A Litany” や、その他その頃書かれた多くの宗教詩の場合と異って、自己の内部に堆積していた〈現世への軽蔑〉と〈あの世へのあこがれ〉の激烈な感情を、抑えるどころか最大限に吐き出し、それによって自己の精神の病巣を探ろうとし、と同時に、罪深い自己を完全に神の手にゆだねることができるような確固とした信仰を育てようとしたと思われる。*The First Anniversary* のつぎの一節

Loth to goe vp the hill, or Labor thus

To goe to heauen, we make heauen come to vs. [F. A. 281-282]

は、人々への一般的な非難であるより以上に、自分みずからへのきびしい反省の言葉であったに違いない。というのは、ダンは、若い頃すでに、たとえば“Satire III” にみられるように、真理の女神のもとに到達するまでは、きりたった崖をよじ登るような、意識的な向上への努力を決して中断しはしないと決意していたはずだからである。それが、たとえ、ダンの『説教』から引用したつぎの数行にうかがわれるような“clambring”であったとしても。

It is a painful clambring; up a hill... or he shall never get up that hill; for it is a steep hill; and there's no walking; but he must have crawl, *hand and foot*. [Sermons, IV, p. 135]

では、このような辛苦にむくいてくれるものは一体何なのであろうか。この問いへの答えは、おそらく、*The First Anniversary* につぎのように表現されていると考えてよいだろう。

... no thing

Is worth our trauaile, griefe, or perishing,

But those rich ioyes, which did possesse her hart,

Of which shee's now partaker, and a part. [F. A. 431-434]

そしてダンにとって、この“rich ioyes”を抱くことは、神性を分けもつこと、つまり、信仰を深めること、信仰の〈梯子〉を登ることであつたらしいのである⁽¹⁷⁾。

第二に、ダンの〈照応〉やくすべての関係や秩序〉が失われたことへの嘆きは、彼自身が連帯意識をもって、社会という人間共同体へ加わろうと決意していることを反映しているように思われる。この詩にみられるダンの社会への態度には、初期の諷刺詩のソニズムは感じられない。彼の態度はより建設的であるとさえ言えるのではないだろうか。

そして、ここでのダンの自己の未来像は、もはや holy layman ではなく、preacher, priest として、とうとう、はっきりとした像を形成するにいたっている。ダンは、たしかに、この詩の中で、マーツが指摘するように、“election”の問題を熟考していたに違いない⁽¹⁸⁾。

もちろん、この詩は“election”のみを課題とした spiritual exercise そのものではない。二つの詩は、エリザベスの死への〈悲しみ〉と、それを償う〈慰め〉の二つのテーマを分け持った、伝統的なエレジーだったわけだし、事実、愛娘の死を悲しむドルアリ夫妻を十分慰めえる力をもった作品だったのである。とは言うものの、ダンが当時、ordination について、大いに悩んでいたからこそ、エリザベスへのエレジーを meditation の形で書くという構想を思いついたのであろうし、またこのような形で最後まで見事に書きあげたことによって、かなりな程度、望んでいた方向に向い、また決意を固めることができたのであろうと思われる。我々は、ダンが自己の内部に、伝道者としての意識を、それが最後の行でラッパのイメージとなるまで次第に盛りあげていったところに、彼自身の、ただ困難を乗り越えるだけでなく、さらに前に進み出ようとする積極的な姿勢を読みとるべきであろう。

The Second Anniversary の初頭にあるつぎの一節

Yet in this Deluge, grosse and generall,
Thou seest mee striue for life;...

[S. A. 30-31]

には、ダンが混乱する世界にありながらも、なんとか生きぬこうと、あがき、奮闘している姿が、暗示されているように思われる。そしてこの奮闘が *Anniversaries* をうんだ最大の原動力であったとも言えるのではないであろうか。

ダンのように複雑で、幾重にも屈折した性格を持った人間には、この教会入りの決意を実際に実らせるのに、それ以後まだ2年余もの年月が必要であったとしても、この彼の努力と、それのもたらしたものは、この段階においてやはり大変貴いものであったと思われる。

III

ダン は 後年、敬虔なキリスト者、すぐれた説教者となったが、聖職叙任までに長い逡巡の時を要したことや、殆ど死ぬまで強大な自我と俗臭とにつきまとわれていたことなどで、彼の ordination の真意に疑いの眼を向ける人も少なくない。が、多少の紆余曲折をへていたにしろ、新しい未来へのダンの内面的変化は、徐々に進行していったのである。

そして、この聖職叙任は、全生涯を通してみた場合、ダン を 真の愛へと導いた結婚と同様、彼を精神的に救うものであったと言えよう。無論、ダン は 叙任の際に、一度に天まで<梯子>を登ってしまったわけではない。がその登る速度は、叙任のもたらしたいろいろな状況によって、かなり早まったらしいのである⁽¹⁹⁾。

それ故、彼のように野心家で、俗気のある人間が、社会的威信の高くない聖職につくためには、どれ程の苦悩と屈辱感を味わわねばならなかったかをも考え合わせるとき、叙任にむけて確かにダンを、大きく一步前進させたと思われる *Anniversaries* 執筆の、ダンの一生における意味は、他の作品にくらべて非常に重大だと言えよう。執筆は一つの明白な変り目をもたらした。つまり、(少々無責任な比喩を用いるのを許していただけるのなら)“Satire III”では、登らなければならない<梯子>のあることに気付いている。“A Litany”では、その<梯子>から落ちまいと苦心する、*Essays in Divinity* では、つぎの試み

のために足固めしている、ダンのそれぞれの姿がみとめられるのに対し、*Anniversaries* は、〈梯子〉の更に上の横木に足を掛けようと必死になって努力し続けるダンの姿を、はっきりと垣間みさせているからである。

註

- (1) この論文は、昭和42年1月に提出した修士論文に準拠しつつ、7月の名古屋大学英文学例会で改めて発表したものに一部補筆したものである。
- (2) G. R. Potter and E. M. Simpson, eds., *The Sermons of John Donne*, 10 vols (Berkeley and Los Angeles, 1953-1962). 以下 *Sermons* からの引用はすべてこの版から。
- (3) Helen Gardner, ed., *John Donne, The Divine Poems* (Oxford, 1952), p. xx.
- (4) Edmund Gosse, *The Life and Letters of John Donne*, 2 vols (Gloucester, Mass., 1959), Vol. I, pp. 174, 190, 195 を参照。
- (5) “La Corona”, “A Litany”, “Holy Sonnets”, *Anniversaries, Biathanatos, Pseudo-Martyr, Ignatius his Conclave, Essays in Divinity* など。
- (6) J. B. Leishman, *The Monarch of Wit* (London, 1962), p. 268.
- (7) Gardner, *op. cit.*, pp. xxxvii-lv を参照。
- (8) *Ibid.*, p. 22.
- (9) L. L. Martz, *The Poetry of Meditation* (New Haven, 1954), pp. 211-248.
- (10) *Ibid.*, p. 227.
- (11) Frank Manley, ed., *John Donne: The Anniversaries* (Baltimore, 1963), pp. 10-50.
- (12) 以下 *Anniversaries* からの引用はすべて、Manley, ed., *The Anniversaries* から。*The First Anniversary* は *F. A.*, *The Second Anniversary* は *S. A.* と略す。
- (13) Manley, *op. cit.*, p. 200.
- (14) 川崎寿彦, 『ダンの世界』(東京, 1967), pp. 200-203.
- (15) *Sermons*, Vol. II, pp. 164-169, はその一例。
- (16) *Ibid.*, Vol. VII, p. 340 を参照。
- (17) *Ibid.*, Vol. I, p. 164 を参照。
- (18) Martz, *op. cit.*, p. 219.
- (19) Helen C. White, *The Metaphysical Poets* (New York, 1956), p. 107.